ラブカクテルス　その８５

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス　その８５

【Ｎコード】

Ｎ３０３８Ｆ

【作者名】

風　雷人

【あらすじ】

今宵は実験の末に出来た、驚異のカクテルです。ご賞味あれ。

いらっしゃいませ。
どうぞこちらへ。
本日はいかがなさいますか？
甘い香りのバイオレットフィズ？
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。
少々お待ちください。
本日のカクテルの名前はホールでございます。

ごゆっくりどうぞ。

私は歴史の証人となる。
いよいよ実験開始だ。
凄まじい数のテレビカメラの前で私は、息を飲んで実験を開始した。

いい天気だ。
秋晴れの気持ちのよい風が頬を撫でる。
暑さもかなり和らぎ、朝夜は段々と寒さという感覚があったのだと
人々の肌にそれを伝える。
そんなある日、事件が起きた。
事の始まりは前から走ってきた友人だった。
彼は何だか必死になって走っている。
ダイエットか、はたまた運動不足でジョギングでも始めたのだろう

か？
よっ！と軽く手を挙げた俺に対して、彼は驚いた顔で近づいてくると、何をやっているんだと俺に怒鳴り、そんな彼の様子にこちらもポカーんとしていると、早く着いて来いと彼は俺の腕を強引に引っ張った。
俺は少しその様子に呆れ、しかも引っ張っられた痛みにイライラを覚えて彼を怒鳴り返すと、今まで見た事もない、まるでパニックにでもなっているような彼は、とりあえず逃げるんだっと俺に言った。
逃げる？
何から？
俺は追いかけるようにして彼の横を走り、その訳を少し息を切らしながら聞いてみた。
すると彼はかなり苦しそうに切り出した。

先程ニュースでやっていたが、学者がある実験をした。
それはある微粒子同士の摩擦にレーザーを当ててやると、数学的計算によるとそこからなんと宇宙、いや、ブラックホールができると言い出したらしい。
天文学者や数学者達はそんな学者の発表をバカにして相手にしなかったそうだ。
なぜならその学者は学界でも有名な空想学者だったらしく、実験でも失敗が多いうえに、そのほとんどが役に立たない内容の事ばかりしていたそうだ。
しかし元々資産家の家に生まれたその学者は、何とか世間に自分を認めてもらおうと狂った実験を重ねた結果、今回のブラックホールの起源探ると名打ち、テレビ公開までしてそれを行なったところ、それが成功し、正論となった。
俺は単純に関心し、しかしそれと今走っている事がどう結びつくのかを訪ねた。
すると彼は真剣な顔でそのブラックホールが次の瞬間、全てを飲み

込み出したと言った。
俺は眉を潜めた。
全てって？
ある学者がそのブラックホールの放送が突然に消えた後しばらく経って、違う番組で緊急放送を流してきた。
その内容が驚くことに、小さかったブラックホールはその中に人も動物も鳥も魚も水も海も大地も空も空気をも飲み込み、そしてやがては地球を全て飲み込み、そして太陽系も銀河系も、そして新たなる宇宙が誕生するかも・・・などと言い出したそうだ。
その報告を受けた全世界の国の代表は、なんとかそれを止めようと色々案を出しあっているらしいが、あまり時間はないらしい。
その結果、とりあえず時間稼ぎか悪アガキに、なんとかなるまでその場所から一番遠い場所に避難しようと、実験をしていた場所のつまりは地球の反対側に皆が集まりつつある。
そしてその場所がどうやらこの近くにある山だそうで、それを聞いた人々が皆こうやって走っているのだそうだ。
そしてやがて車や電車や船や飛行機などでやってくるであろう人々が最終的にその山に群がる。
俺はそれを聞いてタマゲた。
それに加えて背筋がぞっとする。
この先の山なら子供の頃から遊び慣れた土地だが、そんなに全世界から人が集まり、そしてそこにいられるほど広い場所ではない。
しかしとりあえず、そんな事を気にしているよりも何より先に、そこへ向かった方がよさそうだ。
俺はその友人と無我夢中でその山の頂上を目指した。

きっと世界最後の場所になるその頂上には既に、いつものここより人数が多めに集まった人々が各々、適当な場所取りをしていた。
きっとテレビの情報を聞いてきた人が大部分だと思われる。

しかし今のところそんな余裕があるが、後々きっとここは凄いことになるのだろう。
しかしこんなに気持ちのいい日だというのに、まったく世話しない。
俺と友人はその広場になっている頂上の、ベンチのような大きな石に腰を掛け、とりあえず息を着いた。
そしてまだまばらな人達の中で、少し行列ができ始めた売店から財布ありったけのお金で食料と水分を買い出した。
きっと二日ももたないであろうそれらを二人は手にして、この先に起こるであろう最悪な事態を色々語り始めたが、その内あまり危機感が感じられないせいもあり、二人の話題はここでよく遊んだ昔話しになり、そして世間話になり、いつもと違わない心地よい時間を過ごした。
しかしもう日が暮れようとした時には、周りには人が随分増え、これから花火大会でも行われるかのような光景となったが、違っているのはところどころで泣き声などが聞こえたり、イライラした末のケンカや、パニックになる人などの悲鳴が夜通し聞こえ、そして決してそんな中にいつまで待っても花火が上がらない事だった。
俺達二人は少し高いその石の上でそんなリアルな光景に初めは興奮しながら不安を感じていたが、その内飽きや疲れから眠気が起きて、騒がしいそんな中でもうとうとと、いつの間にか寝てしまったのだった。

朝は眩しい太陽の光で目が覚めたが、その凄まじい人の数に目を疑った。
ありとあらゆる人種の人々の群衆。
この先にも後にきっと見ることができないこの光景。
どこまでもどこまでも人、人、人。
映画のワンシーンなんかよりももっと迫力があると、いや、迫力なんて言う次元ではなく、何かが心に訴えかけてくるような、意味も

なく涙が出てしまうような感情に襲われるその事実。
本当に何かが起きてしまうのは間違いなさそうだと感じた。
それはここにいる全ての人が感じているだろう。
そう考えると凄いことだ。全世界の人々がここに集まり、そして同じ事を感じているのだから。
しかしそれがどうであれ、その起きる結果はいい事ではないのが残念でならない。
そんな事を思っていると、誰ともなく人々は空を指さし始めた。
それに目をやると、夜がさっき明けたばかりだというのに空が段々と暗くなってきたのが見える。
ゆっくりだがしかし着実にその闇はこちらに向かってきている。
人々はざわめき出し、神に祈る者や、半狂乱になる者、いきなり倒れる者など様々な反応をしたが、それでも大部分の人は黙ったままそれを見つめ、その行く末を見守った。
風が穏やかに吹いていたが、やがては徐々に強くなっているようだ。
渦を巻くようにして闇が辺りを覆い、近づいてきた。
まるで昼間が凄いスピードで夜になっていくようだ。
そしていよいよ風がゴウゴウと強くなった瞬間、まさに世界は全て闇に、ブラックホールに飲み込まれた。

痛みなどはなく、しばらくは苦しいのだろうと息を止めていたが、辛さに我慢できずに吸った先に空気はどうやらあるようだった。
どうなってしまったのだろうか？
人々は周りにいる顔を暗い中で確かめ合い、とりあえず生きている喜びを感激して喜んだ。
しかしなんなんだ。
世界の終わりはどうしたのか？
周りでは色々な説が語られ、ある人はきっともうここは死後の世界で、まだ人が多すぎて皆天国にも地獄にも行けずにいるだけだとか

言い、また他には、飲み込まれた先にはただ、先に飲み込まれた元と同じ世界が繋がっていて、そこに合流しただけだとか、ブラックホールのできた場所で誰かがギリギリそれを止める事ができたのだとか、ただの夢だとか、やはり死んでいるが、死後の世界なんて現代の世と変わらないのではないかとか。
しかし真相は最後の最後までその瞬間を見て、感じていた俺達であっても断言できるのはまだ暗闇の中に存在している事くらいだった。

見事に成功した。
やはり私の仮説が正しいと立証された。
ある建物の地下の一室で、著名な学者達が長いテーブルを囲うように、ヤケに座り心地がよさそうな椅子に腰掛けている。
中央に座る学者は、目の前にある地球儀を軽く回して、勝ち誇ったように言う。

地球の自転を止めるにはある一ヶ所にありとあらゆる乗り物、例えば飛行機や船、車、そして全世界の人々を集め、その重さの片寄りを利用して太陽と反対方にその重しが、さも串に刺さった丸い球の一部が重いがためにその部分んが下を向くように、地球がバランスを崩す事で自転を止める。
実際やってみないとわからなかったが、天文学的な私の計算は間違っていなかった。

その隣に腰掛けていた、先程テレビでブラックホールができた後の成り行きを話していた学者はその説明に大きく頷き、さすがですと賞賛した。
しかしその中のある学者がこの実験についての犠牲の多さを訴えると、残りの学者は真実に犠牲はつきものだという。
学者は、

他の者達はいい。どうせ増えすぎた人口を整理するのに丁度いいではないか。
ろくでもない人間はこの混乱で幾らか減るに違いない。
それにそのうち誰かれが様子がおかしいことに気付き、やがては元に戻り出せば、地球もバランスを取り戻し、直ぐにでも自転を始めると私の計算上では出ている。
それに加えてこの実験に際して、ここにはあらゆる物を用意してあるのだから、もし元通りになるまで時間がかかったとしても、私達は生きながらえられる。
全ては計算通りだ。

そんな話しを割って入るドアのノックの音がした。
その扉から顔を覗かせた男は慌てて言った。
教授、大変です。
どうやらあのテレビ放送の後に、逃げる群衆がこの建物を腹いせに襲っていったらしく、そのお陰で貯蓄倉庫の電子ロックが壊れてしまったようです。
それどころかこの地下施設からは、それらのせいで外へ出られないようです。
どうしましょう？
教授は驚いた顔を隠せずに、そんな予想外な落とし穴にただただガクリと体を崩
した。

おしまい。

いかがでしたか？
今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3038f/

ラブカクテルス　その８５

2010年10月11日02時39分発行